

この感動をどう伝えることが出来るだろうか。
息を吹き込む職人によって、火と鉱物が溶け合ったガラスは
時間との戦いの中ですべてがひとつになり、内から外へと形が生まれる。
物質と行為が連続したリズムをもつガラス作品の制作は
いつもわたしに新鮮な感動と情熱を与えてくれる。

ムラーノ島の端にあるこの工房に通い始めたのは、1996年からだ。
水上バス乗り場で見知らぬ人から紹介され、偶然に入ったこの工房から
わたしのガラスへの道が始まった。
ガラス制作は、一人のマエストロに二人のセルヴェンテ（アシスタント）がつく
ピアッツァと呼ばれるグループでひとつの作品がつくられる。
最初のマエストロだったリヴィオ・セレーナに続き、2001年頃からは
アンドレア・ジッリとのコラボレーションで作品は生まれている。
作品のアイデアは、そのコンセプトから形になる時もあれば
ガラス素材のプロセスから生まれる場合もある。
作りたい作品のスケッチをアンドレアに見せながら意見を投げ合い
粘土を手にしながらかし合う。
「プロヴィアーモ（試してみよう!）」と言ってくれるものもあれば
わたしの頭の中だけで盛り上がり、アイデアが素材と合わなくて断念するものもある。
いずれもわたしたちの自由で情熱的な話し合いの中で決まる。
窯の左側の熱くて火傷しそうな鉄網に、その場で描くことが多いラフなスケッチを張付け
通常は3人で、難しい作品は4人のチームで、制作に挑む。
その制作をアンドレアに委ねる中で、それを見守りながら、
わたしは右手に鉄の棒を持ち、指揮者のように流れるリズムの中で
より“そのもの自身”が生まれるように指示を出す。
「もう少し吹いて」「ここを押して」
そのものが光を育み姿を見せ始めるにつれて、空気は緊迫し、リズムも秒刻みに動く。
900度ある火の玉が回りながら形をつくる。
アンドレアは額に汗をこぼし、そのままわたしに強い目線を送る。
わたしは軽く瞬きうなずく、もうほとんど言葉はいらない。
マエストロの手と足となるセルヴェンテは、アンドレアの小さな動作で指示を読む。
彼らの動きにはいっさい無駄はない。
「ジーラ（回せ）」「ボン（よし）」「ヴィエニ（来い）」「プロント（できてる）」
「ソフフィア（吹け）」そのアンドレアの掛け声にいっそうリズムが早まる。
鋼鉄の棒の先についた蜂蜜状のガラスが、火の中で回転しながら
膨らみ、縮み、生命のリズムとつながる。
窯の中の炎が、ほこりとすすで薄汚れた工房に眩しく熱い。
窓側にあるラジオから今日の現実の音が流れる中、ゴーゴーと鳴り響く炎の音と熱が
原始を感じさせ、わたしを不思議な気持ちにさせる。

作品にはその日のすべてが関わる。
ガラスのたね、セルヴェンテの動き、マエストロの気分と集中力、わたしの決断
そして時間の中でのプロセスと形、すべてがひとつになり、その日の炎の果実が生まれる。